

小さな形而上学

編集工学研究所 所長
松岡正剛
Seigou Maruoka



3・11のあとしばらく、建築界がシーンとすざいでいて気持ち悪かった。へたに何かを言い出すと面倒になると言わんばかりなのだ。建築家の内藤廣君（当時・東京大学副学長）から電話がかかってきた折りに、「どうするの？」と聞いてみたら、「うん、東大でもそのへん迷っていいね、近いうちに相談する」ということだった。二カ月ほどたって建築家の伊東豊雄さんがやっ

てきて、「みんなの家」の話は交わしたものの、何がわれわれに託されてしまったのかという問題には触れないでおわった。

その後の、復興予算がついてからの仮設住宅問題や防潮堤問題や高台移転計画問題は、諸姉諸兄知ってのとおりである。あいかわらず、何がくすぶったままで、たとえばジャン・ピエール・デュピュイの『ツナミの小形而上学』に

当たるといふような、鋭いか深いか、そのどちらかに突っ込んでいような議論にはほとんどお目にかかれなかった。

形而上学を失う可能性

デュピュイがあれを書いたのは二〇〇四年のスマトラ沖地震のあとで、「未来の破局」とはどのようなものかを問うて、その足掛かりとし

て一七五五年十一月一日のリスボン地震のあとヴォルテールとルソーの対立を鋭くスケッチしていた。

リスボン地震がおこったのはヨーロッパ中が「諸聖人の日」で敬虔な気持ちになっていたときだった。そこへ厄災がおこったものだから、ヴォルテールはライブニッツの神義の未来も危ないじゃないかと皮肉ったのだが、それをルソーが批判して、神の問題と人の問題はもはや別もので、リスボンの市民が六階建ての家を二万軒も建てたことが問題で、人間はこれからは「事前回避」を計画するのがいいんだと息巻いたのである。

デュピュイは、このルソーの反論に、その後の「リスクの思想」と「憎悪の思想」とが芽吹いてしまったと指摘した。そして最近のアメリカがヴォルテール的になりすぎて、フランス政治とフランス・メディアはルソー的になりすぎていると揶揄してみた。

いま、建築界や建築業界はどんなリスク計算に押しやられていて、それをやっつてのけるのは「善」、そこを踏み外すのは「悪」というふうになってきた。あいかわらず偽装も摘発されている。しかし、これでいいのか。

デュピュイはそのことも心配していて、大きな設計シナリオがリスクヘッジやリスク分散に向かっていると、文明も文化も近いうちに本当の形而上学を失うだろうと警告した。そこで、せめて小さな形而上学をこそ、ツナミの後で考えるべきだと言ったのである。

今こそ「日本らしさ」の議論を

文明や文化が「未来の破局」にどう対処するかということは、建築界のみならずいっさいの領域で問われていることである。医療界も教育界も産業界も、この問題から目を背けるわけにはいかなくなっている。

しかし、その対処や対策がリスク分散を基軸にしているかぎり、政治と技術と住民意識だけが問われることになって、そこからは新しい哲学や思想は生まれてこないにちがいない。おそらく二十一世紀にふさわしい設計思想やデザインも生まれてこないだろう。

そんなふうには思っていたら、今度は二〇二〇年の東京オリンピックのための国立競技場の問題が騒がしくなった。今度は技術とコストと工期と、そして住民意識が問われたのだ。すったもんだのすえ、伊東豊雄さんのチームによる案

と隈研吾君のチームによる案が一騎打ちすることになったのだが、それをめぐって東京や日本の未来のための哲学や思想が議論されることは、私が知るかぎりはなかった。

私はこれは「日本らしさ」を議論する大きなチャンスになるだろうと見ていたのだが、それもまったく看過されてしまった。このあと数年のあいだに、もし東京直下地震でもおこったらどうなるのかと思うと、われわれが抱えている「当面建築問題」というもの、ずいぶんつまらないうところの追いかまれたものだと「言わざるを得ない」。

日本人の形而上学とは

かつて地震も研究していた寺田寅彦（物理学者・随筆家）は、「好きなもの 苺 珈琲 花美人 懐手して宇宙見物」という洒落た歌をのこしていた。

物理学者とは思えない暢気な三一文字と思想かもしれないが、そうではない。私はこのような態度や姿勢や主張にこそ、日本人の「小さな形而上学」が躍如するのだと思いたい。そろそろ建築界にも俳諧や小唄が必要になっているのではあるまいか。